
三百年の恋

小春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三百年の恋

【Nコード】

N3340BA

【作者名】

小春

【あらすじ】

三百年前の前世の彼に現世でも会うというお話

彼から電話がかかってきた。

都合のつく日の夜、会わないかと。

そう、あれはもう4、5年前になるだろうか。

彼とはたしかに別れた。それは2度目の別れだった。

1度目はとにかく何だかわからず、一方的に別れを告げられた。他の女と浮気をしたと言って。

本当に浮気はしたのだろうが、わたしは彼が浮気をしたからといって怒る気はなかったし、構わなかった。彼の中で一番だと自惚れていた。だから他の女と遊んでも、自分の元へ戻ってくると勝手に思い込んでいた。

高慢な女だった。

それから暫くして、やはり電話があり、もう一度会って欲しいと言われた。そしてその夜、よりは戻った。

1度目の別れるとき彼からのプレゼントを返した。

それは指輪とペンダント。

だが、よりが戻ったときに返ってきたのは、オープンハートのペンダントだけだった。

彼の心は半分しか戻ってこなかった。

だから、2度目の別れは覚悟していた。

やはり他に好きな人がいると言われた。

しかし、この2度目の別れは堪えた。

泣いた、泣けるだけないた。苦しんだ、苦しむだけ苦しんだ。

なぜなら、彼とは三百年前にも会っている。

あれはわたしが行儀見習いの奉公をしていたお屋敷で。

彼はそこのお屋敷のお殿様に仕える若いお侍だった。

当時、話など出来る状況ではなかった。あの厳しい時代、若いお侍となど。

わたしの家は身分の低い武家で、何とか日々、凌いでいる貧しいものだった。母上は早くに亡くなっていた。父一人、娘一人で家督を継ぐ者はいない。そんな中、なんとか親戚の推挙で奉公することになったのだった。あの時代にしては優しい父上だったように思う。いつも古びた茶色の袴を履き、寡黙な父上だった。

奉公先で自分勝手な恋などできる筈はなかった。それが惹かれ合うというのは、あのようなことだったのだろう。

奉公先の庭は驚くほど広かった。お殿様のご自慢の庭だった。だから、人目を避けるのは容易だった。庭の池のほとりの松の木の下が、約束の場所だった。

月明かりを頼りに逢瀬を重ねる。

だが、互いに触れることもなく、まともに顔を見ることも無い。只々、俯き、一言、二言言葉を交わすのみだった。それでも心臓が潰れるのではないかと思うくらい、ときめいた。

しかし、それも長くは続かなかった。

いつも彼が待つ松の木の下へ行ったとき、彼の同僚が待っていた。それは、この恋の終わりが来たことを告げていた。

「このまま黙っているから別れなさい」と言われた。他のかたの

お耳に入るということは、彼の進退にも関わることだった。

あのときのことは忘れることができない。体中の血の気が引き、
がたがたと震えたことを思い出す。

最後にもう一度お会いすることを懇願し、いつもの場所で彼に会
わせて戴いた。

「もう、これで終わりです」

彼の力の無い声が聞こえる。しかし、終わりにするつもりはな
かった。この恋に生きようと心に決めていたから。後悔は無いと。

「はい、終わりです、今は。ですが、わたくしはこのままの気持ち
でいたいのです。だから、お願いです。この短刀で胸を突いて下さ
い。そうすれば、あなたをお慕い申し上げたままでおれます。あな
たが他のどなたを愛されても、わたくしはあなたを愛し続けること
ができます。ですが、あなたを束縛するつもりはありません。あな
たは自由に他の女人を愛してください」

わたしは短刀の鞘を捨てた。後戻りは無い。

短刀は月明かりを浴び、冷たい光を放ち、彼の顔を照らしていた。
彼の顔は青ざめていた。

「ただ、わたくしはこれで絶命致しますが、あなたにご迷惑をおか
けるわけにはまいりません。ですから、あなたは生きてください。
わたくしの死はわたくしの一存でございます。お願い致します」

彼は泣きながら首を横に振った。

しかし、わたしの決意は揺るがなかった。

「良いのです。あなたのお身内にご迷惑をおかけするわけには参り
ません」

わたくしの家は家督を継ぐ者はいない。父上には申し訳ないが、何とでもなる。

どのくらいの時間、無言のまま、いただろうか。彼はわたしの決意が尋常なものではないことを察し、その短刀を手にする。彼の手は短刀の先を定められぬほど、動揺していた。

江戸時代に入り、しばらく平和が続くと武士といえども、人を殺すことは日常ではない。

わたしは目を瞑った。愛される人に送ってもらえる喜びと、このまま愛し続ける充実感にみち溢れていた。

翌日、父上が自害したであろうわたしの遺体を引き取りにいらしたときだけは、申し訳ない気持ちで一杯だったように思う。

あの寡黙な父上が身体を小刻みに震わせ、悲しみを押し殺しているようだった。あの古びた茶色の袴が震えていた。

現世のわたしの胸には赤い痣がある。それはまるで血が滲んだような痣だ。

これは彼を忘れたくないわたしの気持ちだが、現世に持ち込んだものだろう。しかし、彼は三百年前の顛末は知らない。思い出すことは無い。

2度目の別れるとき、思ったのだ。
もう、良いのではないかと。

わたしは三百年愛し続け、彼に会う為に転生してきたのだ。
だが現世の彼は過去世の彼と同じではない。全く同じ人間ではな

い。

この時代のこのシチュエーションで愛し続けることは、もはや不可能な気がした。あのまま、愛したまま、死んだまま、いたほうが幸せだったかもしれない。

何にでも終わりは来るものだ。

彼はわたしとの恋は三百年前に終わらせていた。
しかし、わたしは自分の意思で愛し続けた。

わたしは着歴の彼の番号を捜す。

それからもう二度と会わないことを告げた。

三百年の恋に別れを告げる。

今から、もう一度、人生をやり直そう。

もう三百年前の妄想にとり憑かれることの無いよう、前を向いて
人の気持ちとは変化するものだ。彼が変化したように、遅ればせ
ながら三百年の時を経て、わたしも変化する。

きっと、その為に生まれてきたのだ。

三百年の恋を捨てる為に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340ba/>

三百年の恋

2012年1月8日18時47分発行